シングルマザーの課長就任　就任編

0.　就任前の引継ぎ

大平華子が課長の内示を受け、就任まで１か月を切った。今回の異動は、発令即業務開始と言うことで、事前引継ぎを行うこととなった。課員には２週間前に内示と言うことで華子は、前任者の鈴木課長から引き継ぎを受けた。業務内容に関しては、今まで自分が見ていた内容もあり、ほぼ想定内であった。

次に引き継いだのは、人事情報であった。これに関しては、会社の公式文書としての給与や賞与の査定と、その根拠がきちんと書かれており、しかも人事への提出用のまとめの裏には、その査定期間の仕事ぶりについて、きちんと情報が残してあるのに驚いた。

また、個人管理と書いたファイルには、3～5 年先まで見据えた個人の活用方針が書いてあった。鈴木課長からは、

「この資料は、本来廃棄すべきかもしれないが、大平さんが今後部下を活用するために参考になるかもしれないので、お渡しします。不要ならすぐにシュレッダーしてください。」

華子は、ここまでしているのかと思い改めて鈴木課長を尊敬した。

「ありがとうございます。課長になる方は、皆さんここまでされているのですか？」

鈴木は一寸迷ったが、全て手の内を明かすことにした。

「ふつうはここまでしませんよ。私の趣味みたいなものもあります。ただここまでやると、人を使うときかなり無理させても大丈夫と言う線が見えますから、得る物も大きいです。これは私の管理職の技の内、秘伝級なのですが、今回は特別大奉仕で出し惜しみなしです。何分今回の大平さんの仕事は絶対成功させろと、天の声が来ていますから。」

華子も今まで何かあると思っていたが、ここで鈴木が口を滑らしたので突っ込んでみることにした。

「天の声とは、大沢部長ですか？」

鈴木は覚悟を決めて、情報を漏らすことにした。

「もっと上ですよ。わが社の社長室にいる瞬間湯沸かし器が、『時間短縮の成果が出ていない』と言うことで、発火しましてね。それで、本社スタッフの泣き付きで『残業時間削減の組織づくり』を貴女なら必要に駆られて行うだろうと、白羽の矢が立ったのです。しかし、この話は聞かなかったことにしてくださいね。ただ、どうしても危ないときは、本社スタッフに相談したら、何らかの助けはあると言うことは、頭の隅においておいてもよいでしょう。」

華子もうすうす感じていたことだったが、内幕を聞いて少し反発を覚えた。その顔色を読んで鈴木は続けた。

「この話の裏を聞いて、貴女が反発を覚えるのは解ります。しかし、私たちも馬鹿ではありません。貴女の能力は十分評価しています。今の課員の中で一番頭がよく、しかもある程度他の人に対しても配慮できる。こういう条件で貴女を選びました。自分に自信を持つことは、仕事の上で大切ですね。確かに昔の貴女は、きつすぎた。しかし失礼ながら子育てを通じて、少し丸くなったようですね。」

これを聞いて、華子も納得した。特に丸くなったという件に関しては、見られているという感じで少し小さくなってしまった。

その後、今後の体制などについて少し話をして引き継ぎは終わった。なお、少し気になっていた和田氏の処遇に関しては、3 か月以内の新規プロジェクトに異動と言うことで、鈴木課長と大沢部長から、内示してもらうこととなった。なお、鈴木課長が庶務事項をお願いしている、ベテラン一般職の藤原さんについては、通常の勤務管理などの事務処理は任せられると言うことで、しばらくは彼女の仕事をいじらない方が良いとアドヴァイスを受けた。華子は、これに関しては田中の助言もあり将来的には対策がいると思ったが、しばらくはこのままで行くと言うことには同意した。

1.　新任のあいさつ

華子が、課長になる日が来た。大沢部長が朝礼に立ち会い、人事を紹介した。鈴木課長は型通りのあいさつで納めたが、華子はこの時のためにあいさつ文を作ってきた。

「課員各位

本日付で課長を拝命しました大平華子です。

今まで、鈴木課長殿が立派に運営してきた、この課を預からせていただきまして、身の引き締まる思いです。しかしながら、今までも皆さんとご一緒に、仕事をしてきましたので、皆さんの力はよく解っています。

皆さんのご協力を願いいたします。

体制の細部などは、今後皆さんと話し合いながら決めていきたいと思いますが、私が今までリーダーをしていた社内開発グループは、松原さんにこれから見ていただきます。また私がいない時は、代行として内田さんにお願いします。

私が頂いたミッションの一つは、この課の運営合理化と考えています。

社内のユーザも含めて、お客様を大切にする。その上で、作業効率化を図ります。そのためにも、設備合理化や相互の協力体制の強化を図っていきたいと思います。

なお、合理化の手始めとして、課内の情報共有手段として、課文書サーバーに、公開情報掲示のフォルダを作りました。この中には、今日の挨拶と新グループ体制案を置きましたので、皆さんも見てください。

繰り返しますが、皆さんの力を信じますので、これからもよろしくお願いします。」

そこで大沢部長が一言加えた。

「差し出口になるが、皆さんの作業効率化による作業時間短縮は、全社的に注目されています。我々もできるだけ支援します。必要な設備などは、大平課長を通じて申し出てください。」

華子は、そこまで言うのと、大沢部長の方を見たが、彼の真剣な目つきを見て、前の鈴木前課長の話がいまさらながら納得がいった。また、和田・内田の２人がうなづいているのを見て、ここまで言ってもらってよかったと感謝した。

2.　最初のミーティング

その後、課内のリーダーとのミーティングを、内田、和田および松原の 3 人と会議室で行うこととした。華子は、前もって準備していた、体制案と議事内容案を出席者に配布

した。
他の３人は、あまり不平も言わずに、華子の案に従った。華子は、最後に言い渡した。
「今後、作業時間短縮のため、会議の効率化を図ります。まず、このように文書共有と会議の事前準備の励行から始めたいと思います。」
これに対して、和田は少し反発するような顔色であったが、内田がそっと抑えるような身振りをした。松原はすぐ切り返してきた。
「そこまでするのなら、プロジェクタとパソコンをつなぎ、議事録を皆の前でまとめながら会議したらいかがですか？そして、その結果を課内の掲示板に公開する形としたら、良いのではないですか？」
これに対して内田が少し反論した。
「リーダー会議の中身は、課員全員に公開できないものもある。議事録を皆公開するのには、問題があるのではないですか？」
華子は、これに賛成した。
「松原さんは、まだリーダーの業務に慣れていないから、情報公開のコツはこれから教えます。内田さんの指摘は大切ですから、議事録はアクセス権をつけて、このメンバーだけが見えるようにしましょう。そして、その中から公開範囲を決めたものを掲示板に公開するようにします。２重の手間に見えるが、削除だけなのでそれほどの手間にはならないでしょう。このような仕組み、松原さん考えてください。」
松原は急に振られて、少し戸惑ったがリーダーになるだけの力を示した。
「この会議は、週１回ですね。次回の前日までに案を作って課長に見てもらいます。」
内田がその発言に対しうなずいたので、華子も認めて会議を終わった。

3. 会議の後で
会議の後華子は、内田と二人で話をした。
「課長、和田さんは少しいつもと違うようですが…」
華子も今後のこともあり、内幕を説明することとした。
「和田さんは、来来月には新規プロジェクトのリーダーとして、異動します。これは、部長たちがすでに配慮してくれたことです。」
「なるほど、そこまで幹部が動くと言うことは、かなり厳しい状況ですか？」
「作業効率向上の話は、社長の方針も受けたものです。できる限り残業を削減することが、私の貰った宿題です。そのためには、松原さん達をしっかり育てないといけない。先ほどの質問はありがとう。松原さんも、管理の厳しさが少し解ってきたでしょう。」
内田も、状況は理解できた。
「解りました。ただ、課長のおっしゃったような仕組みを作るとなると、設備投資の計画なども必要ですね。松原さんは、このような経験はあまりないと思いますが。」
華子は内田が状況を理解してくれているのでうれしかった。
「内田さんは状況をよく解ってくださっていますね。確かに設備投資計画を作るのは大変です。ただ松原さんの将来を考えれば、このような経験も大切だと思います。今回の状況を言うと、大沢部長はこちらのことを全面的にサポートしてくれるので、申請すればサーバーとプロジェクタの認許はすぐ降りるでしょう。しかし、それでは松原さんのためにならないので、一度パソコンとどこかから借りたプロジェクタでプロトタイプ的な動きをさせてから、提案書を作らせたいのです。」
内田はこれを聞いて笑ってしまった。
「松原さんは、課長の手のひらで踊るわけですか。解りました。私も松原さんが計画書を作る時に、手伝わせていただきます。しかしこれで、和田さんでなく貴女が課長になった意味がよく解りました。」
華子は、内田が自分に従ってくれることが解ったので、次の指示を出すことにした。
「内田さんには、私がいない時の代行もお願いします。判断基準は、お客様に迷惑をかけないことを第一にし、その次に従業員の利益を考えてください。なお、相互の協力などはできるだけ進めるようにお願いします。」
内田もこれに応じたが、一つだけ確認した。
「解りましたが、勤怠など実務は藤原さんに任せる形でよいのですか？」
華子は内田が要点を掴んでいることを知り、これならうまくいくと思った。
「藤原さんは、課の庶務事項などは経験豊富ですし、考え方はバランスが取れています。日常の定型的な業務は彼女に任せればよいでしょう。但し、判断を要する業務に関しては、私が対応できない時は、内田さんにお願いします。」
内田も、華子の考えが解ってきたので素直に従うことにした。そこで華子はもう一つの懸案を切り出した。
「もう一人、内田さんのグループの平木君をどう思いますか。」
内田は彼に好意を持っていたので、正直に答えた。
「頭が良いが、人当たりもよいですね。」
華子はもう一言突っ込んだ。
「口は軽いですか。」
内田もこれで、確信が取れたので正直に言った。
「よく立場を弁えています。色々な立場の人と話しますが、いってよいこと悪いことを、よく知っています。実は私の後任は彼をと思っているぐらいです。ただ、今回松原君が先にグループリーダーになったので少し焦りがないかと心配です。」
華子は、そこまで言ってくれたので気が楽になった。
「そこまで考えているなら、彼を私の秘書的な仕事手伝わせてください。一部の管理データの整理や、経営書類の作成を手伝わせたいのです。これは、彼にとって将来役立つ仕事だと思います。」
内田も同意した。
「解りました。彼には私からも、課長が勉強を兼ねて資料作成などを手伝わせる、と伝えておきます。二人の競争ですね。」
華子はここで厳しさを出した。
「私の考えでは、松原、平木の２名とも、将来課長になってもらいたいと考えています。他の課に出るか、この課を広げて２つに割るかは、これからの成果次第ですね。」
内田はこれを聞いて、参ったという表情をした。華子はこれで、最初の関門を通過したとほっとした。

4. その後の改善

その後の課の運営は、思ったよりスムーズに流れていった。会議の事前準備と、パソコン情報の共有も、松原と平木の２人で、検討書の案を作ってくれた。その内容は一度、内田が見てくれたので、華子はそのまま認めて、大沢部長の所に３人を連れて説明に行った。

大沢部長は、少しきつい目の質問をし、無事松原が答えたので、認許印を首尾よくもらえることになった。ただその後、華子と内田に残るように、大沢部長から指示があった。

大沢部長は少し厳しい顔で言いだした。

「大平さん、君に指示したのは時間短縮であり、この説明に３人も連れて来るとは何事ですか？」

華子も涼しい顔でやり返した。

「このような、提言業務を若い人に教えるのは効果があります。まして大沢部長の教えを受けるのは、貴重な機会ですから、将来のエースの勉強のため連れてきました。今後は、私が不在でも今回の３人の誰かが、緊急時のご説明にも上がれるので、長期的には時間短縮になると思います。」

これを聞いて、大沢部長は大笑いで、無事放免となった。

帰り道で内田が、小声で言った。

「さっきは怖かったです。しかし、あれだけきちんと返せるとは、課長はすごいですね。」

華子はもうひとつ念を押した。

「あれで、あの二人が無事売り込めたでしょう。今度一度、平木君に部長に説明に行かせなさい。しかし内田さん、良くチェックしてくれましたね。内容が良かったから、無事通りました。ありがとう。」

これに対し、内田は深く一礼をした。

この後、知的生産性に関する検討を、いろいろ行って以下にまとめることができた。

このまとめでは、平木が活躍した。

http://manabizz.c.ooco.jp/Chitekiseisan.pdf

5. 仕事の展開

その後、課員の仕事は無事進むようになった。華子も、一度子供の急な病気で、休暇を取ったが、その日の対応は、内田さんと藤原さんが無事済ませてくれた。また、部長への提出書類は、平木が下書きを準備してくれたので、翌日朝一番で提出することで、皆に迷惑をかけずに仕事が進んでいた。

さて、ある日皆が定時で退社した時に事件が起こった。営業部で使用している、情報共有システムが、突然見えなくなったのである。営業部の人間が、サポート担当の華子の課に電話したが、対応できる人間がだれもいないという事態となった。

これで怒った営業の中村部長は、同期の大沢部長に電話した。

「大沢君、君の所の情報システムがダウンしたおかげで、仕事にならなくなっている。しかも対応すべき人間が皆定時退社だ。我々の仕事をどう考えているのだ？」

大沢部長は、平然として切り返した。

「それは大変ですね。うちのシステムトラブルなら、すぐに呼び出して対応させます。しかしながら、そちらの部にあるハブのLANケーブルが抜けているというような、初歩的ミスではないでしょうね？」

この一言に、中村部長はぐっと詰まって、部下に確認させることにした。その結果、ハブに行くケーブルが外れていることが、発見されて、システムは復旧した。中村部長は正直な性格なので、直ぐに大沢部長に電話した。

「すまん。大沢君、先ほどの件は、なかったことにしてくれ。…」

大沢部長も笑いながら応じた。

「やはりそうか？まあ、この程度で済んでよかったな。そこで一寸、同期のお前だから、内幕話をしておこう。」

中村部長も、会社では長く生き延びただけあって、何かあると聞き耳を立てた。

「今回の、情報システム課の業務時間短縮は、本社社長室が絡んだ、勤務時間短縮のプロジェクトだ。そこで、つまらないミスが起こると、お前の所に社長室の中野女史あたりが、お茶を飲みに来るかもしれないぞ。」

中村部長は、前に内部監査で種々ご指導を頂いた、天敵の名前を聞いて震え上がった。

「あの、超理性派が来るのか？確かに言っていることはもっともだが…」

大沢部長は、もう少しいじめておくことにした。

「大平課長は、入社時に中野女史が指導した間柄で、結構可愛がっている。それからこれは、お前ほどの人間だから知っているとは思うが、中野女史は昔社長を助けたことがあると言う伝説がある。今も社長の信認は厚い。」

中村部長もサラリーマンであった。

「確かにその伝説は聞いたことがある。この前の監査で、指摘されたことは社長にも正確に伝わっていた…。解った、大平課長に対しては、礼を失わないようにする。」

これで、当日の夜は終わった。

次の日、華子は出社すると、大沢部長から昨日夜営業部で

「システムが動かないトラブル報告があったが、実はLANケーブルはずれであった。」

との電話があった。華子は、この電話を受けて、各グループリーダーに確認した。すると夜間の運営当番者が、情報システムが動かないという電話を受け、その後復旧したという電話を受けたという報告が上がってきた。内田は自分のグループの報告だけに事態を重く見た。

「課長、この対応はよくないですね、直ぐに私と課長に報告すべきだし、できれば一度担当が現場へ行くべきでした。私の指導不足です。営業部長に謝りに行きます。」

華子は、内田を押さえて言った。

「この件は、私の責任です。謝るのは私の仕事です。但し、LANケーブルはずれのケアレスミスなので、向こうも事を大きくする気はないでしょう。」

その後華子は、中村部長のスケジュールを見て、在席していることを確認し、すぐに謝りに行った。

「部長、情報システム課の大平です。この度は対応に不手際があったことお詫びします。」

中村部長はさすがに営業の部長だけあって、人当たり良く笑顔で対応した。

「いえいえ、こちらこそお騒がせしてすみませんね。昨日は、定時間際に物を動かしたので、それでLANケーブルが外れたようです。大沢君にもいじめられましたよ。」

華子は、自分の部門の非はきちんと詫びないと思ったので、もう少し説明した。

「そういうことなら、こちらのミスですね。通信エラーが出たはずなので、その情報で対応すべきでした。申し訳ありません。」
中村部長は、この詫びでかえって困った。
「いえいえ、今回の件はこちらのミスです。恥を大きくしないためにも、この話はなかったことにしてください。」
華子も、中村部長の立場も分かったので、この話をないものとすることにした。しかしついでに聞きたいことがあるのでもう少し食い下がることにした。
「部長、今回の話はこの程度で済んでよかったのですが、やはり営業の方々は、遅くまでお仕事をされているのですね。その時トラブルがあれば大変ですね。」
中村部長は、華子の言い方に少し不安があったが正直に実情を言うことにした。
「確かに、お客様がある仕事だからね。お客様は少なくとも、8時や9時ぐらいまでは、残って仕事をする方がいらっしゃる。その時対応できないと我々も仕事にならないからね。会社方針で、時間効率向上と言われても、こればっかりは難しいものがある。」
華子は、この意見には賛成であった。
「私も、昔ソフト屋の現役時代は、遅くまで対応しましたから、その気持ちはわかります。そこでご相談ですが、部長の方で、何か私たちができる時間のかかる仕事をお持ちではないですか？」
中村部長は意表を突かれたので、真意を問いただすことにした。
「それはどういう意味ですか。私たちの仕事の効率化と言うことですか？」
華子は誤解があったと思ったので、直ぐに訂正した。
「部長、誤解があるようですね。私の考えは、現在の私たちの課は、経費予算抑制のためにも、定時後に人を置くことは難しいのです。しかし、社外支出の作業などを取り込み、私たちの課で対応するなら、残業時間に人を当てることは可能です。適宜工夫して、当直制度を作り、その間に別の仕事を行っておけば、経費の有効活用になりますね。このやり方なら、本社を納得させることは可能です。」
中村部長は不意を突かれたが、直ぐに要点を理解した。
「ベースロードになる仕事を増やすことで、待機要員の費用を捻出するなどとても新人課長とは思えないね。流石は大沢君が抜擢しただけのことはある。確かに、一つ心当たりはある。内の部が抱えている古い資料、結構邪魔になっているが、これを電子化して保存してもらえれば、スペース削減で倉庫賃借料も減るね。このメリットを言い立てれば、本社も納得するのではないかな。」
華子も、中村部長が理解してくれたのでうれしかった。
「部長ありがとうございます。それではこの話は、別途ご相談に参ります。」
中村は、もう少し言っておくことがあった。
「大平さん、この話は少し冷却期間を置いてから、別途行いましょう。今すぐにバタバタすると、大沢君にからかわれそうな気がする。」
華子もこれを聞いて笑ってしまった。中村部長はもう一言付け加えた。
「貴女の仕事の仕方、私は気に入った。これからも、何かあれば相談に乗りますよ。」
華子は、自部門以外に味方ができたことがうれしく、深々とお辞儀をして退出した。